

博士論文要旨

東北大学大学院文学研究科

B0LD1030 野内清香

本論文は、ニーベルンゲン伝承を素材とし、13世紀の匿名の詩人により創作された中高ドイツ語の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』について、その主要人物ハゲネの造形に焦点を当てて論じるものである。

第1章『ニーベルンゲンの歌』とニーベルンゲン伝承では、『ニーベルンゲンの歌』の内容とハゲネの人物像について、また叙事詩の素材であるニーベルンゲン伝承の起源と、叙事詩成立当時までの変遷について概要を述べた。ハゲネは叙事詩の前半においてはジーフリト殺しの非情な暗殺者、後半においてはブルゴント族滅亡の運命に抗う英雄となる。その一見矛盾するかのような性格は、前半と後半が元来は別々の伝説を扱った歌謡であることに由来することを、ホイスラーの発展段階説に基づいて論じた。前半のブリュンヒルト伝説と後半のブルグンド伝説とは、もともとニーベルンゲン財宝を仲立ちとして緩く関連してはいたが、時代とともに伝承内容に様々な変化が起こる。『ニーベルンゲンの歌』の詩人は、これを、前半のジーフリト暗殺が後半のクリエムヒルトによる復讐を引き起こすという因果関係のもとで、一つの筋にまとめあげたのである。

伝承の変化の中で、ハゲネに相当する人物の役割と設定にも様々なヴァリエーションが生じた。ニーベルンゲン詩人は、叙事詩の成立当時ドイツで一般的であったハゲネ像をそのままは採用せず、北欧の第一次伝承にあるような古いエピソードや設定を取り入れて「対立する英雄ハゲネ」を造形していった。そこから逆に、詩人が各種の伝説のヴァリエーションに深く通じていたことも窺われる。

第2章「ハゲネの源流」では、ニーベルンゲン伝承を伝える四つの重要なテキスト(群)、『エッダ』『ヴォルスンガサガ』『シズレクスサガ』『ワルターリウス』を取りあげ、伝承の構成を比較しながら、特にハゲネに相当する人物の描かれ方の違いを、より詳しく検討した。

伝説の初期形態である『エッダ』の諸歌謡や、それを散文化した『ヴォルスンガサガ』において、ハゲネは賞賛すべき英雄として描かれる。シグルズ暗殺にも関与しない。しかし、ドイツへ伝えられるうちに変化した内容を書き留めたとされる『シズレクスサガ』のハゲネは、シグルズ暗殺の首謀者にして実行犯となり、さらには父親が妖精であるという異形の設定が付け加わる。

この伝承の変化の手がかりとなるのが、ラテン詩『ワルターリウス』である。9世紀～10世紀ごろに成立したこの詩に登場するハガノは、ワルターリウスと戦った結果、

片目を失ってしまう。ここからハガノ（ヘグニ）が片目であるという伝承が広まり、さらに片目の神オージンのイメージが重ねられて、ドイツでの新しい伝承では、妖精の息子であることやそれに由来するトロルのような容貌という異教的な要素を付与され、また狡猾な知恵者というイメージを伴って、ヘグニが語られるようになったと考えられる。

第3章『ニーベルンゲンの歌』におけるハゲネ』では、第2章で検討した伝承の諸要素が『ニーベルンゲンの歌』にどのように取り込まれ、叙事詩特有のハゲネが造形されていったかを、「ハゲネの属性設定」と「人物関係の中のハゲネ」という二つの観点から考察した。

ハゲネ個人の属性に関して言えば、「片目」の伝承がハゲネに特徴的な鋭い眼差しの外貌に反映され、彼が宮廷的世界と異教的世界を繋ぐ存在であることを暗示する。また『ワルターリウス』にも見られるフン族の国での人質生活の経歴が取り込まれることで、故郷ブルゴントに対する強烈な執着心や、後半で彼がブルゴント族を破滅の旅へと導く道案内役になることの理由づけが行われている。

ハゲネを取り巻く人物関係については、ハゲネが北欧の伝承のように王家の一員ではなく、親戚であり家臣となったことにより、彼の周りには新たに「トロネゲ軍」とも呼ぶべき集団が配置される。詩人がこうした設定を行ったのは、一つにはハゲネをグンテル王と「対」をなす集団の長として描くためであり、また他方では、ジーフリト殺害犯というハゲネに付帯する負の側面を可能な限り後景化し、滅亡の運命に抵抗する「英雄」の側面を強調するためである。ブルゴント族がフン族の国へ旅立って以降、明確化するブルゴント王家とトロネゲ軍の3対3の構図の中で、リーダーであるグンテルとハゲネ、「潔白な若者」ギーゼルヘルとダルクワルト、「猛き代理人」ゲールノートとフォルケールの対応関係が設定される。罪なきダルクワルトが最初にフン族からの襲撃を受けることで、戦いの大義をブルゴント側に引き寄せ、また代理人フォルケールがハゲネの暴力的な側面を肩代わりして、ハゲネのリーダーとしての風格を高めている。叙事詩全体の大きな二重構造の中に人物配置を通じた小構造を配置する巧みな構成のうちに、ハゲネをブルゴント族の悲劇の中心に立つ「英雄」として歌い上げようとする詩人の意図が現れているのである。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	野内 清香
論文審査担当者	(主査) 教授 森本 浩一 教授 嶋崎 啓 教授 阿部 宏
論 文 名	『ニーベルンゲンの歌』における「英雄」ハゲネの造形
<p>本論文は、1200年頃に成立した中高ドイツ語の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の登場人物ハゲネの造形に焦点を当てた研究である。ハゲネは、物語前半で英雄ジーフリトを殺害し、その妻クリエムヒルトによる復讐の主たる標的となる人物である。それゆえ主人公である両者の「敵役」として理解するのが一般的であるが、本論文の筆者はこうした常識的な読みに疑問を呈し、むしろハゲネこそが叙事詩の中心に位置する「英雄」的人物であるという仮説を立て、その論証を試みている。</p> <p>論文の第1章「『ニーベルンゲンの歌』とニーベルンゲン伝承」では、叙事詩におけるハゲネの基本的な人物像を確認した上で、前半では暗殺者、後半では一族の滅亡に抗う勇士という一見矛盾する属性が付与される理由を、叙事詩の成立過程、つまり二つの異なる伝説をもとに前半と後半が成立した経緯から説明している。論者によれば、一見不統一に見える造形の背後には、前半と後半を因果関係で結びつけて大きな筋にまとめ上げようとする構成的な意図が存在しており、叙事詩の詩人は、ハゲネに関する様々な伝承を取捨選択しつつ、独自の「対立する英雄」を描き出そうとしている。</p> <p>第2章「ハゲネの源流」では、そのハゲネ伝承の諸相が、四つの重要なテキスト（群）、『エッダ』『ヴォルスンガサガ』『シズレクスサガ』『ワルターリウス』の比較を通じて、詳しく検討される。特に重要な点は、もともとの英雄的な人物像とは異なる異教的で狡猾な知恵者というイメージが、比較的新しいドイツ系の伝承の中に生まれてきたことである。</p> <p>第3章「『ニーベルンゲンの歌』におけるハゲネ」では、第2章で検討した伝承の諸要素が『ニーベルンゲンの歌』にどのように取り込まれていったかを、「ハゲネの属性設定」と「人物関係の中のハゲネ」という二つの観点から考察している。論者によれば、異教的要素が、前半から後半へ至る展開を駆動する「対立者」の造形に寄与する一方、ハゲネを取り巻くブルゴント族の主要人物たちの周到な設定を通じて、彼が王族に等しい英雄的存在であることが暗示されている。ハゲネ周辺の王族・家臣の諸特徴と彼らの配置関係に関する詳細な分析は、本論文の中心をなし、論者自身の解釈が最もよく示される部分である。人物造形の背後にある詩人の構成的な意図を重視するその議論は具体的で説得力があり、叙事詩の理解に新しい方向から光をあてるものと評価できる。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	